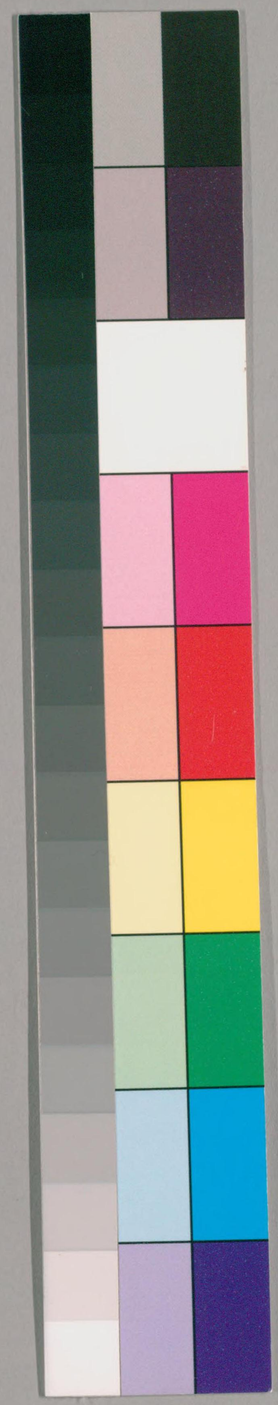

諸州採薬記　一

植村政勝述

共五

伊藤篤太郎記

特 7
5
390

特7-390

伊藤篤太郎記

諸州採薬記抄録巻之一

玄圃齋藏

一武蔵国

青梅村　此所ニ青梅山金剛寺　御朱印
或號石右の寺ニ梅の木ニ青梅絶ヘて
黒季九小有　則此所の町少し青梅濟
并上田縞絹と賣也　市場也　一ヶ月
六度宛有之　之同山家ノ郡川村
外記知行所　宮下村ニ桐生の松と唯雄

よりたる廿七間余有　同国那賀郡安蔵
寺尾中分村小平村春日貞享丁
七色咲乃梅有　是之郡安西吉田庄
名所荒村に三股竹有りとぞ
御用に付上ル

一　伊勢國

紀州御領田丸領間弓村原子谷
といふ所に孫草瀬といふ大難所

尋常の通路小幅十間斗の川ありて其上に
板橋をかけ渡し往来も水際より
橋のうへまで凡半丈有渡る時は橋たよ
たよとゆらゆらとして足危き事言
語に絶たり　橋の辺りにはしる圍
みしらぬ立二匹と知りて此辺に山
蛭（ヒル）といふ虫有て足にまとひ行人をなやむ
依而是文蠶（ニ）風といふ虫多しとぞ文身に

ガラス使用

これ等人どもやほまて熱しては登る下
山の地より男女の形状あらはれけるきの
ありしを行かへし落しぬ地とへん
さる者多し又同国みしま思路神の
火ともして雨夜には多く挑燈のごとく
往来をなしは火の行来ある時は流行（ハヤリ）
病を見ることなく絶へては火に
行来るを絶て子生ては地に依る波
火其上を通るをみるものは病難
を近けしといひて同国の榛原郡三宅村
小檜様（ヒノキワハヅ）といふ名木あり檜の木より檜
の葉に出るは花を檜の花と惣じては村の
檜に檜の葉生り出るを弘法檜と檜と
名付給ふとかや伝へしよし山の木
やり候所寛保元年中台命を奉て信
下候地にまありては檜は国主より一丈半の

ガラス使用

本郷に於て小石川御庭ニ植させら
れける故植の方なし村々ニ而存知不承
師の好より来て往にて此ニ手入れし
こらさる村々ニ而ある事は頃よかり

一 武蔵国

多摩郡恵利米村新町村は二ヶ村小鷺（アツ）
雛石之は石ニ而面を論とうして洋酒
混と加てより上座候也其所吾出ニ沈

筆を放つて見さたく其色云液を承
すくしも無行もなやうなり但云液音也
在ニ石の聲一洞ニこゐし共外諸例
寺門の上随ケ地村といふ所ニ而鮮鷲之石
あり鶏ニ奇除の石へ唐（モヒコと）羽にていつ音（たた）
石といふより同断生村二は石と唐
砂をえ出せし定所しニ而百年斗以来
まく製し出せしより御薬は是より

軽粉（ヤキヲシロイ）とゑふを製し出すなり

一紀伊國
牟婁（ムロ）郡相瀬村より日本無双の大石有
といふ（長サ七十間横凡六十間余なり）は名古座川と
いふ川の側より九月生池中村ニ孫兵衛
の母様として居宅あり奥州ふ證宮
河ふしん様とて斗より といふ名物八九
ホねとうらうもしく枝香同出然錦
山内村千里濱といふ所ニ唐墨と云
物海より出る眼の薬となる同所ニ
濱おもとゝいふものゝ流へ出る其所
みとい濱木綿（ハマユウ）といふ同生薩虫色村より
鷹隣あり三所右同く眼清浄蛇に
なりて彼所の滝と七米色米色まて
満ともいふと云大瀧ニ瀧虫色字と
いふ天曜山道成寺より七間歸也

文武天皇勅願として大宝年中の
御宇紀大臣道成公奉行にてと
いへり淳皇の御宇ハ醍醐天皇の后宮
延長六年子八月廿日に清姫十三歳
の時願てよ

久の世の繁りの経と三熊野に
　那智乃こもるへしことはうるへき

奥州白川（河叙）の僧安珍道歓

三熊野や那智のおやまへときくかくに
　ゐとほまる雲のしきゝる

道成寺開闢より星霜千年に余り
清姫蛇となる節より八百年余年
なるといへとも当寺堂作其頃のまゝなく
有といへとも諸堂たしかなるへきなし
本堂九間に梁行間といふ本尊千手
観音長ケ一丈三尺余国中下無石像なり

ガラス使用

同所吉野山より大和所あり是をとる
此の名所にて常の葉活藤人にしかす
乃しおとしらす

一　ここにまれくし酒やさしく藤人の
ころ豊の奥の玉川よのくろ
観来よりもちの法度の割札あり
同出熊野山の門所にも虫根と人参者
又茈より殺付小大和の関住吉巴戦矢

一大和國

あり薬種の名物也

吉野山本堂権現中尊宮也本地釋
迦長二丈六尺右者阿弥陀（勒）菩薩也長
二丈三尺左者右千手観音長二丈四尺
吉野寺　御朱印千三百石吉良子若蔵
桜と云名木小寄てもあり此所にも有
を集寄せと名付て愛れより満山桜

多し千三抱ある古木所々数多有り
また吉野山経所にて西役上人参らる
東照神君乃命に依て吉野山の内より
吉野石竹といふ石竹を毎年大坂
御城へ献上百両にて上納致し之有
同国長瀬村より吉野小杉極上の紙
類出る南都奥福ら宮保の姫焼多し
すまといふり此跡ほと里方沢まて西有
并ニ猿沢の池より丁程有吉付池の辺
芝地なれハ毎年二月薪の能有春日
大明神へ御朱印二万五千石余といふ
鳥居二ヶ所あり山内東西二里余南
北一里余 御朱印の義はなし
御免の廉多し若草山東大寺山内
二月堂大仏殿 御朱印弐千五百石余
あり堂の大サ竪十七間余横弐拾

高間にある故此山括楼高間大佛の長サ六丈同
國人金剛山河州平下高括石南高家基
菩薩と役の優婆塞二之国修行の
亡とを以てことを付るといつて長サ高さ三丈
高服六臂也耕作の神也といふ此山
括楼の名産にして薬店にて上品と
金剛山括楼と云是れを此山にて括
楼とも称也同国高天寺　河州本下

三千石領知有といふ坊舎四十二ヶ所あり
此社は蔵王大権現也同国大峯前
鬼山後鬼山といふ所あり三ヶ所括楼名産
道路ニ至るまでこれ陰地ニ往古より
譲り伝へ来る家の前鬼後鬼といふもの
其子孫也此二人乃名不動綱助中村
相監其子の名を鬼童鬼熊といふ
其者は親子兄弟を撰はずして婚姻を

ガラス使用

多伝といふ同山の毎出の傍より

きりしといふ同山乃十津川千本杉

乃百姓居住を別当所より御米下

千石宛下し置る所長サ十九里程摸

三里程も有としいふ田畑山林有此所

の百姓ハ御鉄炮の通千石扶持抱千挺

有千挺今有よし　御上洛の節藤

御城の表御門へ相詰候よし云これ当御殿の

皮千枚年献上也　又熊胆あまた出る云用

ゆく当所へ不鉄砲とし鉄炮所り

の武具ハ悪百姓等刃烈を所持候て

是を送る当所の風俗ハ至て農

業不知なるもの又親類にも不知年季の床遅

も御館りの方採抱法様御聞書よ

禽しけ候も是と見へ此非なしといふ

又十津川の乞ニ帰といふ事也村中

ガラス使用

の妻子奴僕自他を撰ハず或ハ旅人等不知ものも行かゝりに男女寝所を同しくしゝて交合すといへり兎角人目家ハ関なく是さへ子嫉妬の心なきなれ所の風俗也淫乱し淫なる色欲のあまり身命をも失へるもの多しといへり此所京都大坂より人多く入込山中なりて旅の成立也瘡毒の毒気多し辟

耕作の事ハ疎く惰弱人と常にして大和十津川乃名ハ古事紀等にも書たるの風俗ハ昔のまゝ不跡遠ハなし

一　淡路国

東西七里三拾丁由良より津井迄南北十三里弐十丁岩屋より福良迄村数弐百拾八ヶ村深山大川なし

鶺鴒嶋ハ天地大明神（イサナキイサナミ）をまつるといふ大祭礼一ケ

求ハ来ヵ

年七十五歳ニ而正月十二日八月十五日七月七日
九月十五日其外ハ手前祝拝席ニ而同国
大棲並村此所芦原国といふ京二三十
間四方男年十五日同天の浮橋右所也同
国求（シノロ）知宿有何れと神代よつんゆとく
村花あしく云ほとに右京之同三條村
此所より諸出へ淡路の島たてき出る
それを見出ぬてハそうしもんがまたもしと云也

一阿波国

東西弐拾五里弐十丁南北弐拾六里
鳴戸日本一乃海上大難所也淡路ゟ
阿波へ三里船渡しや東南の風ゆゑ
此所出船なりぬ西北風にし出船ならし
いふ此所撫養川の時ハ大井川の船し
岩蒲ニ付ハ岩をかくれ海も流是ハ海
上静也此時ニ諸船渡海也渡海の筋

の時ハ山の如くなる大浪打来る所に
三ッ石有て洲本ゟ淡路へかゝりて渡海
又南の方にも中ハ鯛の釣船は鳴戸
鯛といふて賞美して甚石拂なり
三里切戸鳴戸より由へ渡三所有様
渦あさ渦生て高渦也鳴戸の深サ武
百尋余有りと云鳴戸より船乗ゟ九十ハ
撫谷と云所より淡路阿波の国堺なり

洲本より北風并船懸大関所有船の上り
場撫谷の黒渦といふて古跡也里の海士
濱の松は兼好法師の歌有
　世の中渡りくらへて今そ知る
　阿波の鳴戸ハ波風もなし
同国一の難所也仁井田村洲本ゟ東垂根
上人参有伊比谷注村釣橋大難所也
此釣橋長式拾間余幅壹人ふみ深さ

こゝは三丈余も川の上にかけてある
甚深淵其限りを知らず、其上の橋
を行く時は眼暈魂身に添ず。彼
橋は桟道と三筋並べて川へ渡し
其上に階子の様に一尺間程に其木を
宛横木を渡しくさし、是を蔽にしてあつ
付、其上に往来も少なく、風通る時
危く互行る事難し。川の上に渡座
半坂風有時は甚ゆり危き事
中々筆にも及ぶべきにあらず。彼
橋より落て死ける者も多しと
といへりけ橋とやらその名を扇色代
変せとていふまでのなし。彼縄橋と
知らしむして、北に張家塞にて
ても危き場に出る。六七里も遠路
となりて此桟橋を渡る事有よし

ガラス使用

而佐須橋と渡りし道すの如くして
向の岸に渡る跡と顧みれは危峯
こゝ迄に絶へたり至極乃難所なり
同国阿川村一宮長門守古城の跡也
世ニ知らく長宗我部長坂三郎と討
亡し所なり同鮎喰川あり一里ニ
三ヶ所の古跡也同土佐境の山より流
出乃船乃帆柱出る世山ニうけ入

杣中山小屋の中なる森と帽して
終夜羅衣山所々や候んより大キ
成音高き響しく曲ニきこゆるを案内
者ニ其故と問ハ老若答ていつらく
此山ハ吉野熊野天狗山ニ天狗といふ
大魔王なり中納言よりとりふき取
此又山荒大風雨と携其大雷鳴
渡らうしとて有猛三言業ふみもつへし

特 7
390

阿て十し道路ニ接代川ニて九ヶ橋と
数ヶ所瀬ヲ渉リ而して同じ八坂坂
中八瀬瀬中是亦八坂と云ひありてハ
山より入瀬より出る事八度なるゆへに
此名有といふ是国乃名所也

諸国採薬記抄録巻之一終